

展示報告

企画展「風ひかる棚田」

庄内 昭 男*

この稿は、2005年4月から7月にかけて開催した企画展「風ひかる棚田」の実施記録としてまとめたものである。二年にわたる準備期間から開催までを時間の経緯とともに記述していく。

1. 企画の立案－2004年5月

2001年、秋田県立博物館の常設展示の改編(NMP21事業)を考えている中で、体験学習型博物館としてリニューアルした静岡市立登呂博物館を視察する機会に恵まれた。その際、登呂博物館が主催する特別展「棚田のルーツ」を観覧し、フィリピン・ルソン島の農耕具などの民族資料に出会った。木工具や籠など丁寧な作りで造形的にも優れ、使いこまれている上に農耕に関わった人びとの精神性をも映し出している、それが新鮮な印象となって伝わってきた。

観覧していて、このすばらしい資料群を展示そのものが生かされていない思いを抱え、自分なりに展示構成したい気持ちにかられていた。

2005年度の企画展を計画する段階になって、リニューアル後、広くなった企画展示室にふさわしい展示を開催したいとは思っていたが、フィリピンの民族資料を展示の対象とするには、学際的にも国際的にも領域をこえることでもあり、思いは思いと割り切りつつあった。

ところがある講演会の受講をきっかけとして、フィリピン・ルソン島の棚田そのものが文化的遺産として世界遺産に指定されていること、日本でも千曲市姥捨の棚田が文化財指定されてきていることから、稲作文化を国際的な視野から、比較して紹介する意義は大きいと考え、ハードルを一つ越える気で、開催準備にかかった。

2. 企画の経緯と準備－2004年6月

登呂博物館が発行した『館報12』の特別展の事

業報告から展示予算面の、『展示図録』から展示構成の検討をはじめた。展示を担当した登呂博物館の民俗担当者から、資料所有者の連絡先および予算に関わる点を情報提供してもらい、準備作業に入った。

資料所有者は、彫刻家田辺光彰氏であり、展示を前提に資料調査させてもらいたい旨を申し入れた。申し入れの際、田辺氏より民族資料・工芸品としての資料紹介展示ではなく、稲作にたずさわってきた人々の精神文化を伝えるような展示であれば、協力したいとの話があった。

そのことをふまえて、展示趣旨と展示構成について文章化・図面化して、資料の調査に出向いた。

3. 展示依頼および資料調査－2004年7月

①展示依頼

2004年7月、田辺氏宅を訪問した。展示趣旨および展示構成図面を提示し、展示構想について説明を行った。また展示予算の関わりから報償費についても相談した。

田辺氏からは、

- ：展示図録の作成
 - ：オブジェの制作および展示
 - ：国際稲研究所への展示趣意書の送付
- など諸条件の提示を受けた。

②資料調査

登呂博物館の展示図録をもとに、あらかじめ120点の資料カードを作成していた。所蔵資料の状態などを確かめることを主な目的にしていたが、同じ種類のもので多種多様にあること、倉庫など大型資料があり、分解して運送可能であることなどがわかった。

田辺氏より展示趣旨や構成について了解をいただき、図録作成や展示構成などに必要とする写真・本などの提供を受けた。写真は1993年から

* 秋田県立博物館

1995年にかけて田辺氏が現地で撮影したものである。

4. 学芸の会議を経て－2004年8月

田辺氏から提示された条件は、展示構成および展示予算の両方にかかわることでもあり、学芸の全体会議にはかって館全体の了解事項として進めることとした。

ただしオブジェとして制作予定のものが、稲ワラを多量に使用するものであることから、企画展示室内に配置するには空調設備への悪影響が懸念されるとの指摘があって、課題が残った。

5. 展示構成の検討－2004年8月～

展示資料および展示構成を検討していく中で、課題になった点と、その解消点を列記していく。

○フィリピンの資料紹介は、企画展示室の前半部で行うこととし、< 棚田を築く > < 棚田と米作り > < 生き物がすむ棚田 > < 棚田と暮らし > < 棚田と信仰 > で構成を考えることとした。

その後半部を以下の考えで構成した。

○「日本の棚田」と「秋田の棚田」のテーマ設定

フィリピン・ルソン島の棚田では、今だに機械にたよらない農業を行っている。そうした農業で使用された道具類が前半の展示の主体となる。そこでフィリピンの資料の展示だけでは、フィリピン・日本・秋田がともに稲作を基盤としてきた暮らしがあるのに関わらずに、観覧者が異文化としかたとらえてくれないのではないかとの思いがあり、ともに稲作文化を受け入れてきた歴史的な経緯を示すことが、お互いの文化を理解する助けになるのではとの思いがあって「日本の棚田」・「秋田の棚田」をテーマに加えることとした。

2004年8月、日本橋三越本店で「棚田体験展」(主催は、「アジアの原風景・棚田体験展」実行委員会)が開催されたことが知らされ、小野祐見子解説員がもらってきた報告カタログに目を通すことができた。

そこで棚田は、「人と自然がおりなす景観」と意義づけられていた。「日本の棚田」では世代を重ねた農業の営みと環境保全を表現するため、写真を大きくパネル化して展示構成できないかと考

え、カラーコルトンの借用交渉をすることとした。

○「秋田の棚田」の調査の開始

秋田県内の仁賀保高原や鳥海山麓では、海を望む西斜面に棚田が形成されており、景観写真の撮影に出向いた。また民俗担当からのアドバイスをうけ、由利本荘市三丈刈地区の中山間地に営まれた棚田を秋から冬にかけて撮影し、パネル展示することとした。

オブジェ制作に関わる稲ワラの確保については農作業が機械化された秋田市近郊では手に入りやすく、しかも台風の塩害で稲が被害を受けたこともあって交渉に手間取った。由利本荘市の棚田で、手作業でハサ掛けしている光景をみたことから、地元の教育委員会の協力を得て確保することができた。

○オブジェの配置と勝平版画

9月に田辺氏が来館した。企画展示室における展示構成や資料配置について概要説明した上で、オブジェについては、展示エントランスホールに配置することとした。長さ50mのヘビをモチーフにすることから、来館者の導線に支障がないようにとの配慮の元にイメージ図が作成された。

また田辺氏と展示構成の話をした中で、「同じ農業を基盤としていても秋田とフィリピンでは、気候の違いがある、秋田は雪を克服して米を作り続けてきた。そうした農作業の様子を生き生きと表現している、勝平得之の版画を紹介してはどうか」とのアドバイスがあった。それを受けて、昭和20年代後半に制作された「米作四題」の版画の展示を検討し、季節毎の農作業風景にあわせて使用された道具を展示することとした。

○農業と信仰

フィリピンでは自然にたよっての農業が営まれており、農作業の折りにふれてさまざまな儀礼が行われてきている。秋田でも稲作に関わって儀礼があったが、秋田に残った農耕儀礼を紹介することでまとめにしたいと考えた。民俗担当の高橋正から館蔵資料をもとに構成の検討をしてもらうこととした。

○展示タイトルについて

展示構成を考えている間に、秋田では「棚田」という言葉自体が一般的になっていない感じをも

っていた。そこで今後の広報活動のためふさわしいタイトルをと思い、展示を解説している解説員10名の感性で決めたいと考え、解説員10名にアンケートでタイトルを募り、「風ひかる棚田」に決めた。

○「ふるさと環境メッセージ」コーナー

NHKに秋田支局を通じて、全国から募集した環境メッセージの中に棚田の保全を訴えたものがあり、「日本の棚田」と合わせてコーナーを設けた。

6. 展示準備-2004年9月～

上記構成をふまえて、以下の通り書類を整えていった。

①借用依頼文関係

：2004年9月24日 国際稲研究所へ挨拶文の送付

*国際稲研究所の活動の紹介と稲研究所が掲示していたHarold C Conclin氏が撮影したIFUGAO写真の公開依頼

：2004年10月27日 ふるさときゃらばんへのカラーコルトン借用依頼

：2004年12月3日 秋田県立近代美術館への勝平得之作「米作四題」の借用依頼

②展示資料の決定と資料写真撮影

資料リストを点検し、資料借用の準備を行ってきた。田辺氏には確定したリストと資料カードをあらかじめ送付した。

12月13日展示図録作成のため、田辺氏宅を再び訪問した。

資料リストを見た田辺氏から、もう少し儀礼にともなうものをふやしてほしいとのことであった。提示されたのは穂摘具や金属製品などで、構成そのものに影響がないこと、展示の表現が豊かになることから受け入れることにした。したがって資料点数が40点ほどふえて180点となった。

スライドとデジカメで図録掲載資料を同時に撮影した。スライド撮影を庄内が、デジカメでの撮影を石井志徳が、方量の記録作業を丸谷仁美が、それぞれ担当した。

③広報準備関係-2005年3月

ポスター制作 1300部作成
 ちらし配布 20000部作成

*ポスターデザインはバナウェイの棚田を背景に、タイトルと世界遺産地であることを強調した。

③資料搬入から展示作業-2005年4月

*4月5日(火) 資料運送業者入札
 造作指名(コルトン・パネル紙貼り)
 図録印刷業者指名

*4月10日(日)～12日(火)
 前企画展「秋田の手仕事」片付け

*4月12日(火)
 資料借用(勝平版画・近代美術館)

*4月13日(水)～14日(木)
 資料借用(田辺光彰氏宅)

*4月15日(金)
 資料到着(秋田県立博物館)

*4月13日(水)～15日(金)
 カラーコルトン・大型パネル組み立て

*4月16日～20日
 パネル・資料配置

*4月18日(月)
 資料およびワラ等くん蒸消毒

*4月20日(水)
 オブジェ頭到着、田辺光彰氏来館

*4月21日(木)～22日(金)
 田辺氏がオブジェ制作を指導、ボランティア延26名参加

*4月23日(土)
 オープンセレモニー、オブジェ完成
 ギャラリートーク(友の会)

7. 付帯事業-2005年4月～

<国際稲研究所の活動報告> 活動を紹介するパネルとIRRIが広報用に作成したパンフレットをおくコーナーを設けた。

<脱穀> 西仙北町で生産された古代米の提供を受けた。5月の連休期間を通じて正面玄関で杵と臼を使用した脱穀を実演し、来館者にも体験してもらった。

<俳句募集> 「風ひかる」が春の季語であるのが分かったのは、展示が始まってからであったが、棚田の景観には叙情的な感性で接してもらうことも必要と感じ、急遽俳句を募集することとした。

<解説資料の作成>民俗担当の丸谷仁美によって、フィリピン・ルソン島の稲作儀礼についての解説資料が作成された。

＝展示参考文献＝

静岡市立登呂博物館 2001

特別展『棚田のルーツ』

国立歴史民俗博物館 2004

『環境史研究の課題』

Harold C Conklin 1980

Ethnographic Atlas of IFUGAO

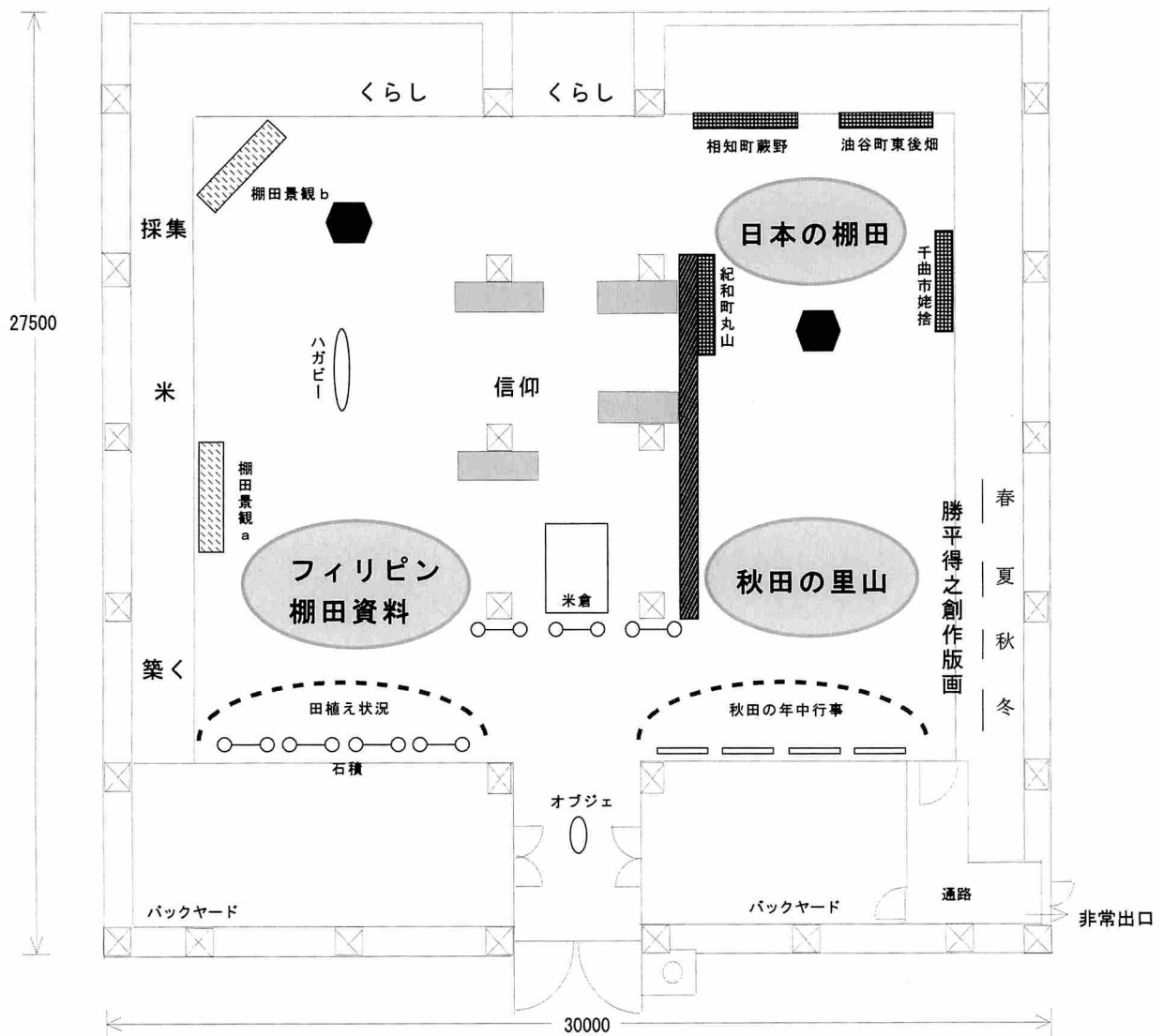
ふるさときゃらばん 2004 『棚田体験展』

石井里津子 1999 『棚田はエライ』

移動壁面

可動ケース
2400*1200

○ ○ パナー



レイアウト図



ルソン島資料展示導入



ルソン島資料展示〈棚田を築く〉



ルソン島資料展示〈棚田と米作り〉



ルソン島資料展示〈棚田とくらし〉



ルソン島資料展示〈棚田と米作り・穂摘具〉



ルソン島資料展示〈棚田と信仰〉



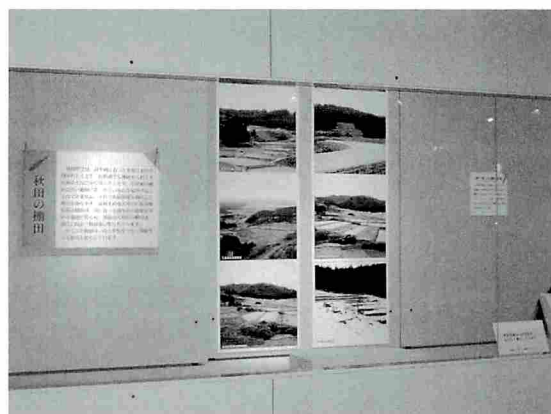
ルソン島資料展示景観



ルソン島資料展示景観



「日本の棚田」



「秋田の棚田」



勝平得之創作版画と農具



「秋田の年中行事」



企画展示室前のオブジェ